

板橋で見られるヤドリギ

2005 年 1 月 15 日

昨年の夏から秋は、日照りと 10 個もの台風（上陸）による長雨という異常気象でした。晩秋も高温で紅葉が 1 週間以上も遅れ、12 月も遅くまで櫟などの葉が残っていました。

落葉樹が葉を落としたときに目立つのがヤドリギですね。平成 13 年の 11 月に作業体験で訪れた乗鞍高原では、ヤドリギがやたらと多かった記憶があります（27 号に体験報告しました）。板橋区内でヤドリギが見られるのは次の場所です。

大門見晴台公園近く（笹目方向に向いて左側）民家の櫟（一本に 2 株）

赤塚城址公園南西の柵際の櫟（一本に 10 株ほど群生）

上板橋 2 丁目の旧川越街道沿い民家の櫟（一本に大きな 1 塊）

の 2 株は大きさがかなり違うが、どちらも葉が茂っており元気なようです。庭木で日当たりもよく、櫟の枝をヤドリギの上方で切り詰めているが、ヤドリギを残してくれました。のヤドリギは櫟の太い枝分かれ部に近くにあり、しかも大きな木の群落



大門見晴台公園近くのヤドリギ



切り倒した白樺に寄生したヤドリギ（乗鞍高原高、2001年11月）には実が付いていた。

の中にあるため、日照不足のためか葉の数が少なく、まばらな枝が垂れ下がっており、あまり元気がないようにも見受けられる。あるいは種類が違うのかも知れない。のヤドリギは元気です。



赤塚城址公園南西の柵際のヤドリギ



上板橋2丁目旧川越街道沿民家ヤドリギ

残念ながら消えてしまったのは次のところです。

美術館前、道の向かい側台地傾斜部の欒（2本に各1株）

赤塚7丁目、前谷津川の南側民家の欒（1株）

松月院境内の欒（1株）

とのヤドリギは宅地開発で宿主の欒が伐採されました（は10年位前、は一昨年）。のヤドリギは大きな塊でしたが、3年くらい前の台風でもぎ取られたそうで（お寺の話）欒の枝に大きなこぶだけが残っています。ヒコバエ（孫生）などが生えてこないか注意していきたいと思います。上記の各ヤドリギに実が付いていたかどうかは確認しませんでした。株の大きさから実を結ぶ樹齢になっていたように思われますが、欒の葉が落ちてからの観察では実がありませんでした。すでに食べられてし

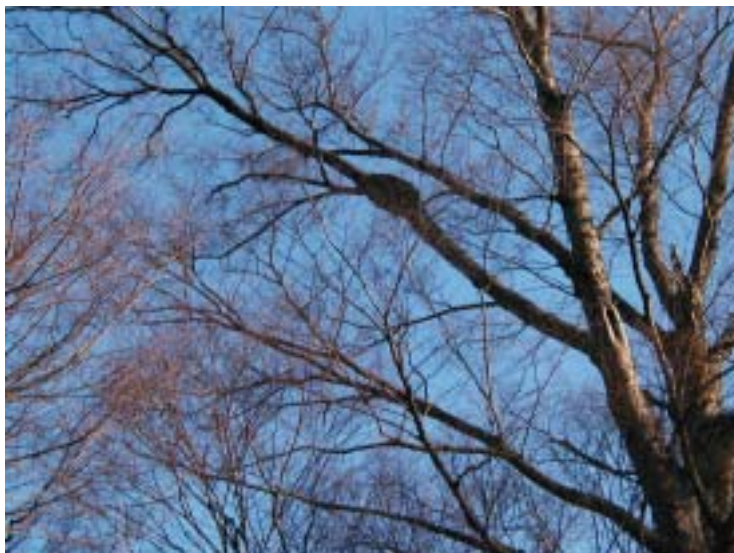
まったのかも知れません。これを機にさらに観察を続けたいと思います。

ヤドリギは宿木とも書き、ヤドリギ科ヤドリギ属の寄生植物で、葉は葉柄がなく3～6センチの長さで、先が丸くて厚い革質の光沢のある楔形（倒披針形）で、単葉が対生に付く常緑小低木の種子植物です。別名としてホヤとかトビツタなどがあります。ホヤは葉がランプのほや（火屋）の形に似ているから？それとも半透明な黄色い実がランプに灯が点っているように見えるからでしょうか、トビツタは枝から枝へと繁殖するからでしょう。枝は大体2つに分かれ（3つ以上の分枝もある）、若い枝は濃緑色で光沢があり、古い幹は濃褐色になります。前年枝の先端（葉の付け根）や分枝部に花柄のない黄色い小さな花が2～4月頃咲きます。花の基部には杯状の小苞があり萼は厚く4裂し、オシベに花糸がなく葯は萼片に直接付きます。果実は6ミリ位の球形で11～12月に淡黄色に熟れます。

実は甘くて小鳥（特にキレンジャクやヒレンジャク）が好んで食し、粘着質の果肉は消化されずに排泄されるが、糸を引いて鳥の尻にぶら下がって運ばれます。種子（扁平で緑色）が他の木の幹や枝に触れると、付着して発芽し成長することが知られています。空中や地上では発芽しないそうです。

寄生する木（宿主）はよく見たシラカバや欅のほかエノキ、ブナ、ミズナラ、クリ、サクラ、ヤナギ、クワ、アカシデなどの落葉樹（広葉）ですが、板橋地区のヤドリギで見える限り欅と相性がいいようですね。寄生根を宿主の樹皮に食い込ませて水分と養分を貰い、自分で光合成して成長しますので半寄生植物に分類されます。こんもりと丸く茂り、直径が80センチ位まで育つようです。

松の木と同じように常緑で美しいことから、世界中で生命力や癒す力のシンボルと考えられ、東洋では古くから縁起木として飾られ、枝や葉を薬（神経、血管、筋肉や関節炎に、またガンや婦人病）にしてきました。西洋



松月院境内の欅にはヤドリギの跡のこぶが残っている

（主に英、仏）では幸福をもたらす木としてクリスマスのときに入り口や室内に飾り、ヤドリギの下に女性には誰でもキスが許されるという風習もあるそうです。もみの木よりも古くから市場で売っていたそうです。また、ヨーロッパの工芸品にモチーフと

して、ヤドリギのプロペラ形の双葉図案が数多く使われています。

ヤドリギ（学名 *Viscum album* var.）は世界中に 40 属 1400 種もあると言われています。国内にある主なものは、いわゆるヤドリギの外に次の種類があります。

（１）ホザキヤドリギ：花がまとまって（穂状花序）咲く（これだけが落葉型）

（２）オウシュウヤドリギ：白実でヤドリギの母種と言われ、欧米では殆どがこの種類。

（３）オオバヤドリギ：常緑広葉樹（椿やモチノキ、マサキ、木犀、アセビ、クチナシ、ウバメガシなど）の常緑樹と一部の落葉樹（モミジ類）にも宿る（半蔓性で絶滅危惧種）

（４）ヒノキバヤドリギ：葉が針葉樹のように細い（椿やヒサカキ、ネズミモチ、イヌツゲ、アセビ、クチナシなどに、たまに落葉樹にも寄生）

（５）マツグミ：赤松や樅や栂などの針葉樹に寄生する。

ヤドリギは落葉樹にだけ寄生し、常緑だと思っていたので認識をあらたにしました。英名（Mistletoe）には鳥モチの意味もあり、実際に果肉で鳥もちを作っていたそうです。ちなみにヤドリギの花ことばは Kiss me で、西欧の風習から考えられたようです。

ヤドリギは他の植物の側皮層を貫き木質部まで根を伸ばすので、いわば接木状態で成長することになります。したがって寄生された部分より先の宿主は養分が不足し、極端な場合には枯れ込みます。また、種が付着しやすい老木の幹や太い枝に多く付くようです。

区内では大きな樺の木がすっかり減ってしまい、ヤドリギが繁殖出来る条件も減ってしまいましたが、これからも種が運ばれて来て生えることがあるかもしれません。あるいは、区内にある株からの繁殖もあるかもしれません。区内では樺だけに付着しているようですが、他の木にもあるかも知れません。区内全て隈なく調べたわけではありませんので、見落としているヤドリギがあるかもしれません、何処かで見つかった方はお知らせください。（高い木位置で枝の分かれ目にある鳥などの巣が紛らわしいのでご注意ください）（猪鼻 昭二）